

## ブルーギル駆除後のため池でカワバタモロコの個体群を再生できるか？（予報）

鈴木 規慈<sup>1\*</sup>, 河瀬 直幹<sup>2</sup>, 畠山 絵美<sup>1,3</sup>, 門坂 章次<sup>4</sup>, 紀平 大二郎<sup>5</sup>, 原田 泰志<sup>1</sup>

<sup>1</sup>三重大学大学院生物資源学研究科, <sup>2</sup>みなくち子どもの森自然館, <sup>3</sup>こうすい, <sup>4</sup>甲賀市,

<sup>5</sup>水生生物保全協会

絶滅危惧種に指定されている多くの淡水魚類において、それらの減少要因の一つがオオクチバスやブルーギル等の肉食性外来魚類による影響であることが指摘されており、それらが侵入した水域の多くでは、在来の淡水魚類が絶滅もしくは減少してしまうことが示唆されている（たとえば、Yonekura et al. 2004）。一方で、絶滅危惧種の保全を行っていく上では、かつての生息環境を再生し、それらへの対象種の再導入の必要性が示唆されているが、本邦においてそのような研究が行われた例は少なく、手法の有効性については十分な議論がされていない。そこで本研究では、絶滅危惧種であるコイ科のカワバタモロコを対象に、外来種駆除後の生息地およびカワバタモロコの個体群の再生の可能性を明らかにすることを目的とした。

調査地は滋賀県甲賀市の山間地域にあるため池であり、かつては多数のカワバタモロコが生息していたが（河瀬、未発表データ）、現在では、数年前に放流されたブルーギルによって対象種が絶滅状態にあった。そこで、2009年8-11月および2010年5月にブルーギルの駆除を行った。駆除は、セルピンおよび刺し網による採集に加えて、ポンプアップによる池の水抜きを行いながらブルーギル駆除を行った。なお、2009年の水抜きの際には、地曳き網および刺し網を、2010年には刺し網を用いた。

その結果、調査期間において約2000個体のブルーギルが駆除された。採集個体における体サイズの分布から、ブルーギルが放流されたのは約3年前であり、2回の繁殖期を経ていることが明らかになった。一方、駆除個体の多くは水抜き時に回収されたものであり、セルピン、刺し網および地曳き網による駆除効果は非常に低かった。すなわち、ため池のような小規模水域においても、ブルーギルの小型個体が多い場合には、それらの駆除方法はあまり有効ではないと考えられた。

本発表では、ブルーギルの駆除過程および駆除後に行われたカワバタモロコの再導入実験の途中経過に議論の重点を置きつつ、底樋がなく、水を完全に抜くことができないため池における外来魚駆除の奮闘記を交えながら、外来魚駆除後のため池への絶滅危惧種の再導入の有効性について議論させていただきたい。